



青木繁《二人の少女》明治42(1909)年 笠間日動美術館蔵

**企画展** 平成27年10月3日(土)～11月8日(日)

## 2 日本近代洋画への道～山岡コレクションを中心に

**企画展** 平成27年12月5日(土)～平成28年1月11日(月・祝)

## 2 戦後70年 鳥取と戦争

**企画展** 平成28年2月27日(土)～3月21日(月・祝)

## 3 鳥取の表現者 File.07 コウゲイノモリへ ―探究する工芸家たち

3 シリーズ「学校と博物館をつなぐ」⑤ 博物館利用案内～けんぱくの使い方～

4 [自然] コラム 植物展示の救世主～精密レプリカ～

5 [人文] 資料紹介 国宝・三仏寺奥院[投入堂]の模型

コラム 姫路の殿様が鳥取にやって来た！

6 [美術] コラム 博物館の在り方に関するその後の検討状況について

活動レポート まちなかに潜むアート～ワークショップ「カメラをもってまちあるき」より～

7 [山陰海岸学習館だより] 新しくなった山陰海岸ジオパークの地形地質模型

8 講座・観察会・毎週土曜はアートの日！

# 日本近代洋画への道～山岡コレクションを中心に

日本で油絵(洋画)が本格的に普及し始めたのがいつ頃か、ご存知でしょうか。

江戸時代後期、舶来の書籍や石版画などを通じてもたらされた西洋の迫真的な描写表現は、当時の日本人を魅了しました。教科書や専用画材のない困難な状況にありながら、人々は遠近法や立体的な表現など西洋の絵画技法を身につけようと、限られた情報の中で試行錯誤を繰り返しました。例えば、写生画で有名な円山応挙は、覗き眼鏡に用いる「眼鏡絵」で西洋絵画技法を研究したことで知られています。また、伝統的な日本の画題に西洋画の陰影法や遠近法を取り入れた写実的な「洋風画」も各地で描かれました。

その後、開国により西洋人画家から直接指導を受けることができるようになると、日本人の手による油絵が描かれるようになり、本格的に洋画の歴史が始まります。日本近代洋画の父と称される高橋由一は、横浜に住むイギリスの新聞挿絵記者であったチャールズ・ワグマンに師事し、幕末から明治時代にかけて数多くの作品を残しました。なか

でも半身が切り取られた新巻鮭を、まるで実物がそこに吊されているかのような写実表現で描いた《鮭図》は、由一の技術力の高さを示す作品のひとつです。

由一は生涯日本から出ることはありませんでしたが、黒田清輝ら次の世代の画家たちのなかにはヨーロッパへ留学する者が現れます。本物の西洋絵画に実際に接する経験をした彼らが、彼方で学んだ印象派風の外光表現を取り入れた画風は、その後の日本洋画のアカデミズムとして広く普及しました。

本展ではヤンマーディーゼル株式会社(現ヤンマー株式会社)の創業者・山岡孫吉氏が収集した、幕末から昭和初期に至る日本近代洋画史上貴重な作品を中心にした約180点の名品により、日本の近代洋画がどのように成立してきたのかを辿ります。

また鳥取県の洋画の形成期にかかわった遠藤重をはじめ、洋画発展のための布石を打った森岡柳蔵などの作品も併せて展示し、鳥取県の近代洋画がどのように発展してきたかをご紹介します。

(美術振興課 林野 雅人)



高橋由一《鮭図》油彩・板 1879・80年  
笠間日動美術館蔵(山岡コレクション)

# 戦後70年 鳥取と戦争

今年、アジア・太平洋戦争の終結から70年目の年にあたります。この70年の間に、戦争を知らない戦後世代は総人口の8割を超え、戦争は遠い過去の出来事として風化しつつあります。戦争体験者が年々減少するなかで、戦争の歴史をいかに記録していくのか、また、戦争で得られた様々な教訓をどのように次の世代に伝承していくかということが、私たちの大きな課題となっています。



鳥取市上町ヒマ報國農場写真(昭和18年(1943))当館蔵

今回の企画展は、昭和6年(1931)に勃発した満州事変に始まり、昭和20年(1945)8月15日に終結した戦争下の鳥取県内の様子をご紹介します。展示では県民のみなさんからご寄贈いただいた戦争関係資料を中心に、県内外に所在する鳥取県ゆかりの品々を集め、鳥取出身の将兵や郷土部隊、また銃後の県民生活、戦時下の子どもや女性たちについて展示します。また、終戦直後についても取りあげ、鳥取県民がどのように戦争の惨禍から立ち直っていったのかも紹介します。

さらに、本展では鳥取県内の戦争遺跡についても紹介します。これは平成26、27年度に当館が県民のみなさんの協力のもと行った「鳥取県内の戦争遺跡調査」の成果をお見せするものです。県内には人々に忘れられてしまった戦争遺跡が今でも多く残っています。こうした戦争遺跡の存在を明らかにすることを通じ、身近な歴史として戦争の



国民総決起ポスター(昭和19年(1944))当館蔵

記憶を次世代に伝えていければと思います。

本展では、なるべく身近な戦争の資料に焦点を当てることで、戦争が遠い場所で起こった過去の出来事ではなく、私たちの身の回りで起こった事件であるにとらえ、戦争の惨禍や平和の尊さを足元から見つめ直す契機にしたいと考えて開催するものです。

(学芸課 大嶋 陽一)

# コウゲイノモリへ — 探究する工芸家たち

平成21年度にスタートした当館の企画展「シリーズ 鳥取の表現者」は、鳥取県にゆかりがあり、現在活躍中、もしくは近年物故した作家を、年齢やジャンルを問わず広く取り上げ、今日の鳥取県の美術状況を紹介しようとする展覧会です。年に1回のペースでこれまでに6回開催し、ジャンル別に見ると絵画が3回、グラフィックデザインが1回、現代美術が1回、そして工芸が1回という実績になります。

本年度開催する第7回展では、現在県内外で活躍し、高い評価を得ている8名の工芸家を選び、それぞれの代表作を中心に紹介したいと思います。陶芸家・前田昭博氏の個展を第1回展として開催して以来、ひさびさの工芸展となります。

紹介する工芸家は、染織では寺口敬子氏、船越久美子氏、山下早苗氏、山下健氏の4名。さらに、陶芸の河本賢治氏、有線七宝の橋詰峯子氏、板ガラス積層の矢野志郎氏、そして手漉き和

紙の長谷川憲人氏が並びます。年代もさまざまな彼らですが、ひたむきに自己の制作を究めていくことで明確なヴィジョンを確立し、揺るぎない歩みが続けている点では共通しています。スペースの関係でそれぞれの特徴を詳しく紹介できないのが残念です。

さて、「コウゲイノモリへ」というタイトルですが、現代の多様な工芸表現に出会うことのできる場として、様々な樹木が生い茂る“森”をイメージして名づけました。今年は「その1」として「探究する工芸家たち」を紹介し、次回以降はまた別の切り口でセレクトしていきたいと考えています。



ギャラリーあんどうでの「寺口敬子 型絵染め展」(2015年)会場の様子

本展が、本県ゆかりの工芸家たちのクオリティの高さを示すと同時に、県内外の工芸ファンや学生たちが優れた工芸に気軽に会うことのできる場になればと思っています。

(美術振興課 三浦 努)

## シリーズ「学校と博物館をつなぐ」⑤

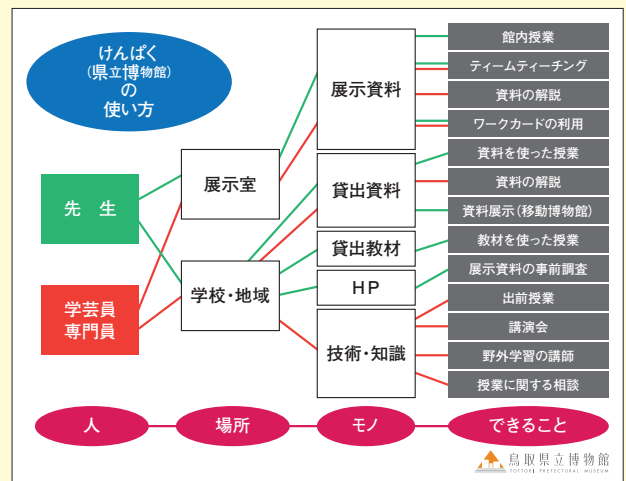
### 博物館利用案内～けんぱくの使い方～

より多くの先生方に博物館を利用してもらうという目的で、本誌でシリーズ掲載してきた先生向けコラム「学校と博物館をつなぐ」も第5回を迎えました。今までは、自然・人文・美術の各担当が、それぞれの分野の特性を活かした連携のようすを紹介してきました。今回は、学校が博物館をどのような場面で利用できるか改めておさらいしてみたいと思います。

博物館の利用といえば、社会見学であったり遠足で立ち寄りたりということが最も多いと思います。その中で、展示室で解説を聞いたり、復元民家で学習したり、講堂でお話を聞いたりといったことがあったのではないかと思います。それ以外にも、博物館での校外学習に限らず、来館しなくても学校の授業で利用することができます。例えば、博物館の資料や教材を貸し出すこともできますし、学芸員や専門員が直接学校に出向いて出前授業や講演会を行う事もできます。あまり知られていないところでは、授業を行う上での学術的なサポートなど、相談活動も行っています。

授業で何か困ったことがありましたら教科に関わらず

ひとまず博物館まで電話をください。そこから新しい連携が生まれるかも知れません。博物館のスタッフとつながりができる、困ったときの神頼みではないですが、何かと心強いと思います。(学芸課 田中 博昭)



けんぱくの使い方

鳥取県立博物館 普及担当：0857(26)8044

# 植物展示の救世主～精密レプリカ～

標本箱に並ぶ昆虫標本は、それだけで美しく、その形や色は人々を魅了します。ほ乳類の剥製は今にも歩き出しそうですし、鳥類の剥製は、次の瞬間に飛び立つことさえ予感させてくれます。化石資料は、何万年の沈黙を破って、今ここで再び太陽の光を浴びているのだと思うと、それだけで壮大なロマンを感じます。しかも、これらはすべて実物標本です。このことは、植物を担当する学芸員からするとうらやましい限りで、湧き上がる嫉妬心の源なのです。

博物館の植物標本はほとんどが押し葉標本です。押し葉標本は、作ったときは鮮やかな花や葉の色が残りますが、やがて色あせて茶色味を帯びてきます。標本を学術的に扱う場合には、このような変化はほとんど問題ありませんが、展示となると少々都合の悪いことが出てきます。口の悪い人の言葉を借りると、「せっかくの花がつぶれている」とか「枯れ木や枯れ草のよう」などと言われる始末です。押し葉標本は学術的に他の分野の標本にひけは取らないのですが、悲しいことに色と形の情報が失われているのです。

写真1はカリガネソウの花です。長く筒のように伸びた花びらは、濃い紫色の斑点があり先端で五つに分かれます。雄しべと雌しべは、花の中心から上側の花びらに沿うように大きく突き出て、ほぼ反転する大きな弧を描き、雄しべより雌しべの方が長く、4本の



写真1: 特徴のあるカリガネソウの花 (2013年9月6日, 船通山)

雄しべにも長短各2本があります。カリガネソウは、県内では西部の船通山付近にしか自生しませんから、この特徴的な植物を目にする機会はなかなかありません。

一昨年、カリガネソウの姿を紹介するためにレプリカを作りました。レプリカは複製標本とも呼ばれ、樹脂などを使って、植物の形や色を精巧に再現したものです。

レプリカ作りは製作者と植物の生育地に出向くことから始まります。まず、実際の植物を前に、仕上がりの大きさや植物全体の形を決めます。植物は動物と違って動けないので、植物自身が形を変えながら周囲に順応して生きています。光を求めて曲がったり、何者かに食べられて、途中から新しい芽を出したりは日常茶飯事です。よく観察して、最良の1株を選び、次の工程「型どり」に入ります。型どりは、樹脂を流し込む鑄型を作る繊細な作業です。花の場合、がく、花びら、雄しべ、雌しべなどのパーツに分解してそれぞれを溶けた寒天の中に埋めていきます(写真2)。



写真2: 寒天に埋められたカリガネソウの花びら (花びらの色が透けて見えている)

葉やつぼみについても同じ作業をしますが、一つとして同じ花や葉はないのでとても根気のいる作業です。

植物のパーツを埋めた寒天が冷え



写真3: 小さな花が球形に集まるヒゴタイ (レプリカ・部分)



写真4: 白く透明感のあるギンリョウソウ (レプリカ)

て固まると現地作業は終了です。工場へ持ち帰られた寒天からは埋められた植物が取り出され凹型の鑄型となります。そこに樹脂を流し込むと、各パーツの形状が微細な部分まで正確に再現されます。そしてひとつひとつのパーツに着色を施した後、それらを配置や向きに注意しながら組み立てれば完成です。これらの作業は、学芸員の監修のもと、実物や写真と見比べながら慎重に進められていきます。

このようにしてできたレプリカは、植物の色や形を正確かつ立体的に再現し、その情報や魅力を十分に伝えてくれます。県立博物館の常設展示や移動博物館では、ギンリョウソウ、ヒゴタイなどの植物をレプリカで展示しています(写真3・4)。植物の精密なレプリカはまさに、植物展示の救世主なのです。

(学芸課 清末 幸久)